



この授業は良好な里山である戸塚区の舞岡公園で履修生徒が1年間を通じた稲作体験を行い、体験をもとに身近な自然の大切さや里山の保全について自分自身で感じ、考える授業です。年間9回の舞岡公園でのフィールドワークでは、ボランティアで舞岡公園の里山保全活動に取り組んでいる谷四囲会（やよいかい）の皆さんと協働させていただき、学校の授業ではその活動を振り返りながら、自分たちと生きものや人、自然や里山保全とのつながりを考え、体験を深めていきます。

また、卒業生がたびたびフィールドワークに参加してくれるのも特徴の一つです。高校生にとって、身近な存在である大学生や社会人の先輩との交流もキャリア教育になっています。さらに、数年前からはご家族連れの方々の参加もあり、小さな子供たちからおじさん、おばさんまでいろいろな年代や立場の方々との交流、コミュニケーションをすることで高校生は社会や人と関わることに自信を持っていきます。里山の四季の移り変わりとともに生徒の成長が感じられる授業でもあります。

【生徒のレポートの一部を紹介します。】



4月16日の田起こしからはじまり毎年恒例の泥んこレースをやる代掻き。腰が痛くなる田植え。暑い中での草取り。稲穂を早く実らせるための水抜き。そして稲刈りをして脱穀。すべて手作業でやり昔の人のすごさを感じました。そして手作業で一生懸命作ったお米を食べたとき今まで食べたどんなお米よりもおいしくて感動しました。舞岡は人の手を加えながら保護している自然で“里山”といいます。そして里山にはたくさんの生き物がいます。その生き物たちが田んぼのなかをきれいにしてくれるから私たちは無農薬でお米を育てることができます。こうやっていろいろな生き物たちの力を借りて自分たちが生きていけるといこともこの舞岡の授業で学びました。この神奈川の環境問題は大師高校だから体験できる授業だと思います。私はこの2年間の授業でお米を作る大変さ、食べ物大切さ、いろんな生き物と生きていくことの意味、そしてなにより人と人との繋がり大切さを学びました。（3年次 女子）

初めはこんなしょっちゅう田んぼに行くのだなんて思っていなくて正直とてもめんどくさい気持ちでいっぱいでした。ましてや遠いし朝早いし、ほんとに嫌で嫌で仕方なかったです。けど、一回行ってみるとなんだかんだ森とか自然が好きなのはなかなか舞岡が気に入りました。作業は正直面倒くさいことばかりでしたが楽しく取り組むことができました。私がドロドロの田んぼの中に入ったのは、田んぼの中の草むしりのときだけでしたがなんかあの中で稲が成長していくんだよなーって考えると、とても不思議な感じがしました。それからやっぱ大変な作業をしていくうちに食物の大切さを実感しました。普段なんてことないかのようにご飯を毎日たべていますがそれにはたくさんの時間と苦労がかかっていて感謝して食べて当たり前だなんて思いました。舞岡は



日本らしい自然と、食物の大切さ、人との関わり大切さをたくさんたくさん教えてくれました。それも全部、谷四囲会の皆さんのおかげです。舞岡の素晴らしさは行って見ないとわからなくて言葉で説明しきれないけどみんながみんな良いとこだなって絶対に思うはずです。(3年次女子)

ドロンコレースは今でも忘れません。恐らくこの授業の中で1番印象に残っている出来事です。他にもいろいろな農業体験をしましたが、1年間通してどちらかというと谷四囲会のみなさんやこの授業のみんな、他にも来ていた方との交流のほうがとても印象に残っています。作業よりもみんなとあれこれ話したり、一緒に飯を食べたり。楽しかったです。



舞岡や学校の授業とは別に、夏休みの中学生向け体験授業や、近くの中学校に行き、中学生に自分達の活動を

発表する機会がありました。今まで人前で発表とかしたことなくてとても緊張したけど、舞岡での活動でいろいろな人と交流していたので不思議とテンパることなく話すことができました。中学校に行ったときは事前にレポートを班に分かれて作って、今までの活動の写真を印刷して持っていきました。中学生に今まで自分達がやってきたこと、やってきて感じたこと、新しい発見などみんながそれぞれ思ったことをうまく伝えることができよかったです。1年間この授業をやって自分はとても変わったなあと思っています。今まで人と話すのが下手でなかなかしゃべれなかったんですが「神奈川の環境」という授業を取り、舞岡に行き、様々な人と交流してなんだか自然と話せるようになりました。(3年次 男子)

#### 【昨年度初めて授業を担当した若い先生の感想】

驚いた授業の一つを紹介したい。「神奈川の環境問題」という授業である。舞岡公園（横浜市戸塚区）に生徒を連れて行き米を作らせる。里山の中に田んぼがあり、ここには昔の風景が広がっている。ここが横浜なのかと疑うような場所である。川崎から電車バスでおよそ1時間。生徒は「ここ何県？」と聞いてくる。工場地帯の川崎南部から来た生徒たちは、ここが神奈川県でましてや



大都市横浜とは結びつきが上手くいかない。そんな環境で、市民ボランティアの方や地域のご家族の方々と一緒になって稲作体験をしていく。今年の生徒たちは、面倒くさがりが多く、時間にもルーズである。最初から田んぼなんて入ってやるかと決め込んでいる。虫が嫌だ、汚いダルイ。口から出るのは文句ばかり。忌憚のない発言で市民の皆さんを呆れさせる。ところが、回数を重ねると彼らの刺が落ちていく。笑顔が増えていく。あるときには市民の皆さんとドロドロになり、あるときは子供達とカエルを捕まえる。またあるときは校長も参加し、皆で手を

つないで代掻きをする。市民の皆さんが生徒の名前を覚えて声をかけてくれる。教員と生徒ではなく、利害関係の無い大人が自分の名前を覚えて色々教えてくれる。ここに彼らは心を許し作業をする。帰り道、「あの人が言ったこと、どういうこと？」と私に聞いてくる。普段なら、分からないことは分からないで終わらせて済ませてきた生徒が、済まそうとせずに理解しようと変化している。すごい授業だ。こんな授業に出会ったことがないし、この活動が授業として存在するのも総合学科ならではである。